

[001]健康科学表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/4783986>

出版情報：健康科学. 1, 1979-03-30. 九州大学健康科学編集委員会
バージョン：
権利関係：

編集後記

▼「健康科学」の創刊号をお届け致します。本号は昭和53年4月に発足した九州大学健康科学センターが年一回発行する定期刊行物です。本センターは人間の健康問題に関して総合的な調査・研究を行い、健康の維持・増進のために様々な現象を科学的に分析していこうとするものです。まだ、発足したばかりですので、旧来の保健管理センターと保健体育学科の教官による寄せ集めのジャーナルになってしまいました。当初の企画では4～5編の予定だったのですが、原稿締切り後にも執筆者が名乗りをあげ、編集委員は悲鳴の連続でした。

内容は原著、研究資料、紹介・解説、これまでの紀要の総目次および研究活動報告を掲載しました。各論文は個人の意志によって配列しましたので、内容にそぐわないものもあろうかと考えます。また、投稿規定も明文化しないままにスタートしましたので、各論文の形式も様々でお叱りをうけるものと思います。なにはともあれ、本センターの幕開けの一頁としてスタートしたというのが偽らざるところです。いずれも新体制への踏石としてご理解いただき、多くのご批判とご指導をお願い致します。

本格的な研究は「春日原」の新キャンパスに研究棟や体育施設が完成してからになります。この些やかなスタートが生活と密着した研究の発端となり、21世紀の人々に、いや遠い将来の人類の健康に貢献し得るものとなることを祈念するものであります。(M. T.)

▼保健体育部門の動向をお知らせ致します。昭和51年4月1日に着任された坂井純子助手は、53年3月31日をもって本学を退職、出身地の東京に帰られ、引き続き東海大学体育学部でご活躍中です。その後任として、小室史恵助手が昭和53年4月1日に着任されました。小室氏は横浜市出身で、昭和51年3月に東京学芸大学保健体育学科(運動生理学専攻)を卒業、さらに同大学院を修了されました。主に「運動負荷時の生化学的研究」を手がけており、健康科学センターの一員としての活躍を期待しております。

多々納秀雄助手は、昭和52年8月30日から約13ヶ月間、カナダのウオーターラー大学およびアメリカのイリノイ大学での研修を終えて、「体育社会学におけるスポーツ体系論」の研究に一層の磨きをかけて、無事帰国されました。

緒方道彦教授、小宮秀一助教授および今野道勝助教授は、ネパール学術調査(第1次)のため、昭和52年9月22日から同10月18日まで、さらに今野助教授は、昭和54年1月20日から同2月16日(第3次)まで現地での調査・研究を終え帰国されました。この調査は健康科学に関する国際的学術調査の第一歩として今後に大きな期待が寄せられています。(K. F.)

▶有名な話ですが……。「この研究はどういう役に立ちますか？」と問われた研究者が答えていわく。「生れたばかりの赤ちゃんが、どんな役にたちますか」と。健康科学も新しい研究領域として無限の可能性をひめているものであろう。その可能性を開花できるか否かは、我々スタッフの双肩にかかっているという意気込みをもちながら、この創刊号を編集しました。

これまでの「九州大学保健管理センター紀要(九大保健紀)」の編集方針として、業務報告にもかなりのスペースをさいてきました。この「健康科学」では、業務報告はのせないことになり、別に業務報告書を発刊することになりました。第1巻は昭和54年6月ごろ発刊されます。このなかで、健康管理部門や健康教室部門の業務の報告の他に、健康科学センターの創設のいきさつや関連文書、組織、スタッフ構成、活動概況などについてもものせていくことにしています。

末尾になりましたが、「九大保健紀」が第4巻(1975年刊)までとなり、早い機会に第5巻を刊行できなかったことを、深くおわびします。特に早くから原稿をいただいております。掲載ができてしまった先生がたには、大変御迷惑をおかけしたことをおわびします。(O. M.)

▼本号の編集は徳永幹雄、峰松 修、藤島和孝の3名が担当しました。